



今江祥智 の本

第11巻

写楽暗殺

理論社

今江祥智
の本
第11巻

写楽暗殺

理論社

今江祥智の本第11巻

一九八一年十一月初版

一九八八年五月第四刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



写楽暗殺

第一章	モンキー・マジック	7
第二章	イエスタデイ	18
第三章	カモンナ・マイ・ハウス	29
第四章	イミテーション・ゴールド	40
第五章	マイ・フェア・レディ	51
第六章	トゥ・ヤング	61
第七章	ムーン・リバー	71
第八章	オンリー・ユー	81
第九章	ストレンジャー	91
第十章	マイ・ウエイ	101
第十一章	メランコリー	111
第十二章	フェーム	122
第十三章	ゴッドファーザー	133
第十四章	クール	144

第十五章 セ・シ・ボン

155

第十六章 ライト・アズ・ア・フェザー

166

第十七章 スーパー・スター

176

第十八章 サイド・バイ・サイド

187

第十九章 ムーンライト・セレナーデ

198

第二十章 サンライズ・サンセット(上)

208

第二十一章 サンライズ・サンセット(下)

218

第二十二章 イッツ・ア・ビューティフル・デイ

228

第二十三章 ノー・グッバイズ

239

第二十四章 シャンハイ・バンスキング

250

第二十五章 サンデイ・ブラデイ・サンデイ(上)

261

第二十六章 サンデイ・ブラデイ・サンデイ(下)

272

第二十七章 レフト・アローン

285

あとがき

297

解説 清水真砂子

299

編集委員 上野 瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本 第11巻

写楽暗殺

第一章 モンキー・マジック

1

生まれてこのかた、夕子は、猿のことなど気にしたことがなかった。それが、この二日間で、猿のことが気にかかって仕方なくなってしまった。

むりもない。

二日の間に、これまで見たこともないおかしな猿と顔つきあわせ、もう一つ、うづまき靱猿というかわいいのたであってしまったからなのだ。

まず、夕子をそのおかしな猿とひきあわせてくれたのは、岐阜の前田の叔父さんだった。前田の叔父さんは、岐阜の大学で先生をしていて、女子学生に「動物行動学」とかいふ学問を教えているということだ。そのせいか、近くの犬山にある日本モンキー・センターには、ちよくちよくでかけていて、そのことをとても気にいっているらしかった。叔父さんが夕子にくれる年賀状やバースデー・カードのすみっこには、きまって「いちどモンキー！

センターをあんないさせて下さい。ご先祖さまにあわせませう……」と、書きそえてあった。

その大山行きが、この土曜日にやっと実現したのだ。三日続きの連休だった。ちょうど名古屋に用があるというとうさんにくっついて、夕子は前田の叔父さんのところへつれていってもらった。

叔父さんは夕子がつくのを待ちかねるように、すぐに大山へ案内してくれた。みちみち叔父さんは、そこには八十種類あまりの猿が飼われていて、大はマウンテン・ゴリラの生きたのから、小は小鳥くらいの猿まで見ることが出来る……と話してくれた。

（小鳥くらいの猿なんか、いてるはずがないのに……）

と、夕子は思ったが、叔父さんの真剣な表情を見ると、口にはできなかった。そのかわり、思いうかべられるかぎりの猿の種類を復習してみることにした。

（ゴリラ。チンパンジー。オランウータン。テナガ猿。オナガ猿。メガネ猿。キツネ猿。それにもちろん、日本猿……）

それでおしまいだったが、小学校の五年生というとしにしては、それでもけっこう知っているというべきだった。

（そやけど、猿が八十種類もほんまにいてるやろか。チョウチンならべつやけど……）

しかし、いざモンキー・センターについて、広びろとした坂道とモンキー・アパートの案内図を見ると、もしかしたらやっぱり叔父さんの言う数だけいろいろな猿がいるような気もちになった。

坂道をのぼり、ビジター・センターに入り、叔父さんのかんたんな説明をきいた。鼻をきかせるかわりに、目をきかせるようになったのが、そもそも、他のけものたちと猿——人間との別れ道だということが分った。つきでた鼻がひっこみ、低くなり、かわりに目がならぶようになると、なるほど、キツネや犬とちがって、人の顔に

近づくわけだ。

マウンテン・ゴリラの剝製はくせいの前のケースに小さな猿の剝製もならべてあった。その小ささに、夕子はたしかにおどろいた。けれど、それは剝製だからちんだのではないか、とまだ思っていた。

それからモンキー・アパートの見物が始まった。次から次と、いることいること。どれもこれも顔かたち、毛いろ、動きまわるようす、鳴き声、こちらを見る表情、しぐさ……なんかが、いちいちがついていた。そして、よく見ると、どの猿も、たしかにだれかに似て見えてくるのだった。

オランウータンは、一年生のとき夕子をいじめた広岡くんに似ていた。小枝をにぎりしめてこちらをにらんでおどすところまでそっくりだった。どこか仙人じみた顔つきのブラザモンキーは、横町の葉屋のおじいさんにそっくりだし、ものおもいにふける哲学者といったところがあるテング猿は、担任の石塚先生に似ていた。こうして次々に見ていけば、いずれうちのおじいちゃんそっくりの（つまり、わが家のご先祖さまにあたる）猿にであうような気になってきた……。

そこで、南米館というところへ入り、鳥のおりそっくりのおりに入れられた何十という小さな小さな猿の群れを見て、息をのんだ。いったいこれでも猿なんだろうか。どれもこれも、てのひらにのせられるほどの大きさしかなかった。とにかく小さいのである。それが、小鳥の飛びまわるように、枝を走り渡りとびまわり、小鳥のように、ちちちち……とさえずるように鳴くのである。

しかもその小さな小さな顔は、目鼻だちなどひどく人間に似ていて、それを思いきってちぢめたようなあんなびいなのだ。そいつが、シャツのボタンくらい目ので夕子をじっと見つめ、小首をかしげて鳴くのである。夕子はそんな猿をてのひらにのせてみたくなった。文鳥みたいに飼いたくなくなった。なかには、クロクビタマリンのように、犬の顔そっくりなのが小鳥の体についたようなものもいて、それだと、犬と小鳥をいっしょに飼っている気に

なるだろうな……と思ってしまった。するとまた、そんな夕子の気もちが分ったかのように、ちっぼけなマーモセットがいくつもいくつも、夕子の顔の前に集まってきてくれるのだった。夕子はその館の小猿の群れのことをすっかり気にいってしまった、長いこと、そこにいた。叔父さんは夕子が気のすむまで見るあいだ、のんびり待っていてくれた。

そのあと、夜行性のスロー・ロリス（特大のトンボめがねをかけたみたい）や、テナガ猿の森もおもしろかったが、夕子には、なんといっても南米館の小猿の群れが心にのこった。

その夜、叔父さんちに帰り、お風呂もゆっくり使わせてもらい、（一日動きまわったので充分疲れていたから）すぐにでも眠れるはずなのに、夕子はなかなか寝つかれなかった。

目をとじると、昼間見た猿たちが、次々に目の奥の暗闇にあらわれては消えるのだった。なかには、昼間やっただように、いきなり夕子の目の前に手をつきだしてきたりするのがあると、おどろいて目をあけてしまうからだった。

家でなら、起きていって、かあさんの横に床をとり、そこで眠らせてもらえるのだが、叔父さんちでは、そうはいかなかった。眠れないときよくやるように、夕子は羊の数を数えることにした。

（羊がひとつ、ふたあつ、みつつ、よつつ、いつつ……）

夕子の頭の中に、まっ白な綿菓子みたいな羊がならび始める。綿菓子がふくらみふくれあがって白い雲になり、夕子をそっと包み始める。雲の中で夕子は目をつむり、ふんわりしたいいい気もちになる。これでやっと眠れそう………と思ったとたん、何十ぴきもの日本猿の群れが、いきなり羊の白い雲のなかへなだれこんできた。夕子はびっくりし、同時にモンキー・センターの入口で見た注意書を思いおこしていた。

「ご注意

酒氣をおびた人、または、犬その他の動物をつれた人の入園はお断りします。」

しまったと思ったが、もう手おくれだった。羊はあっというまに追い散らされ消されてしまい——夕子の頭の中はまた、かけまわりとびまわる日本猿の群れでいっぱいになり——、目はしーんとさえかえってしまった。

こうなると、なんだか自分まで猿になってしまったみたいで、夕子は思いきって起きあがり、寢床の上に坐り直した。猿島の猿がよくするように、肩をまるめ首をちぢめ、きょとんとした目で、ゆっくりあたりを見まわすのである。——部屋の中は真っ暗で、ほとんど何も見えず、そのままじっとしていると、ちょうど、夜の森のどこかにうずくまる猿、といった気もちになった。家の中は寝しずまっについて——森全体がしずまりかえっていて、夕子はひとりぼっちの離れ猿といったところで、なんだか、しょんぼりした気もちになってくる。体が小さくちぢまってくるようだ。小さく小さく、……。犬よりも小さく、猫よりも小さく、そう、ちょうど小鳥くらいの大きさになってしまった——と思ったとき、夕子は耳許であの、

——ちちち、ちちちち……。

という、なつかしい鳴き声を聞いた。夕子も同じ声で返事してから、ああわたし、ワタボウシ・タマリンになったンやわ……と思った。体が軽くなり、床からとびあがってみた。木の上に集まっていた仲間が受けとめてくれ、いっしょにかけた。心が軽くなり、闇がこわくなくなった。夕子の体は小鳥みたいに宙にういて——とてもおだやかな気もちだった。そしていつのまにか夕子はやすらかな寝息をたてて、ことりと深い眠りの中におちこんでいった……。

あくる日の夕方、こんどは叔父さんが京都にきていた。夕子のとうさんの招待で、いっしょに狂言見物というわけだった。狂言も、あのおかしな猿同様、夕子にとって初めて見るものだった。

—そんな昔のお芝居、わたしにも分る？

夕子はとうさんにねんを押してきいてみた。わかるわかる。日本のもんやないか。お前も日本の女の子やないか。とうさんは面白そうに言うだけで、てんでとりあってくれなかった。そやかていつかテレビでちょっと見た歌舞伎も、お正月に見たお能の舞台もことばも、さっぱり分らへんかったもん……。

夕子はすねたように言いつのつたが、やはり相手にしてもらえなかった。百聞ハ一見ニシカズ……と、何やら難しいことを言われただけだ。

会場のどこにも、夕子くらのとしの女の子なんて坐っていなかった。若い人は思った以上にいたが、だいたいが、おっかなそうな顔つきの大人であり、おとしよりだった。見まわしたり見つめたりすると、注意されたり叱られそうで、夕子は座席にかたくなって腰をおろし、そっとあたりをうかがいながら、（あ、あのおじさんは、パタス・モンキーみたい。あ、あちらはマントヒヒそっくり……）

と、くらべてやることにした。それだと少しは気が楽になってくると思ったからだ。さいわい手提げには、犬山でもらったモンキー・センターの案内パンフが入っていて、そこには何種類もの猿がカラー写真入りで紹介されている。夕子はそいつをそっと開き、近く遠くのシートにもたれる大人たちと猿のひきくらべに熱中した。ほんまに、猿に似た人が多いこと……やっぱり、人間のご先祖さまだけのことはあるわ……。

ふいに、舞台から声が——歌うようないい声の流れてきて、夕子はあわててパンフレットを閉じた。

——……これは、このあたりに住いたす者でござる。天下治まり、めでたい御代でござれば、このあいだのあなたこなたの茶の湯は、おびただしいこととござる。それにつき、それがしも、今日は山一つあなたへ、茶くらべにまいりますが、おりふし、茶のつめたものがござらぬによって、伯父御の方へ借りにつかわそうとぞんずる。まず太郎冠者を呼び出だいて、申しつきよう。ヤイヤイ太郎冠者、あるかやい……。

*

これなら分りそう……と、夕子はほっとした。舞台では、主人の前にかしこまった太郎冠者に、用がいいつけられていた。茶くらべ用のお茶の上等、でかけるとき身につける太刀ひとふり、おまけに乗っていく馬まで借りてこいというのだった。それはちとあつかましますぎるのでは——と思った太郎冠者は、一人では無理で——と抵抗する。すると主人は、では、馬の口をとる者もついでに借りればよいと、むちやを言うのである。

太郎冠者は、ぼやきながらでかける。伯父御どのにあい、たのんでみると、気のいい伯父御どのは、茶も太刀も馬までも貸してくれるが、家の者はみないそがしくて、馬の口ひく馬丁まで貸すのはむりだから、ひいて帰るように言う。しぶしぶひいて帰ろうとする太郎冠者に伯父御どのは注意する。この馬には悪い癖がついた。横でセキをするとかけだすというのである。太郎冠者が、いま風邪気味で困りましたな、というのと、

——寂蓮童子六万菩薩、静まりたまえ、止動方角、止動方角。

となえて、のり静めればよいと教えてくれた。

さて、太郎冠者がやっとなのおもいでもどってくると、主人は待ちくたびれたようすで、おそすぎる、どこぞで油を売っていたのだろうと言いつのり、礼のひとつも言わない。腹にすえかねた太郎冠者は、馬の横にいつて、エヘンエヘンとせきばらいをしてやる。たちまち馬はひとはねし、主人はころげ落ちる。それを見とどけてから

太郎冠者は馬にのり、例の呪文をとなえてのり静める。

やっと馬にのった主人が、こんどはまた、太郎冠者に、やれ先へいけとか、あとからついてこいとか、文句ばかり言うので、も一度セキばらいで馬をはねさせる。主人はみごとに落馬。したたかに腰骨を打った主人は、もう馬にはのらぬと言う。かわりに太郎冠者にのらせ、自分は太刀や腰桶をもって歩くことになる……。

これなら、夕子にもよく分った。せりふもはっきり聞きとれるし、筋書きもよく分るし、おかしさも分る。夕子はだれよりも澄んだ笑い声をあげた。横で、とうさんも満足そうだった。止動方角というおまじないの言葉も面白くて、夕子はいつか見た『メアリー・ポピンズ』の映画にでてきた長いおまじないのことばといっしょに、これもおぼえておこうと思った。いつか友だちを煙にまいてやるために……。

「止動方角」の次に演じられたのが「靱猿^{うづぼる}」という出しものだった。猿という文字を見て、夕子は叔父さんと顔を見あわせた。ほんとの猿が出るのやろか。あんな大人に猿のまねができるもんやないもん……。夕子は、かたずをのむ思いで舞台を見ていた。

こんどの舞台も主人である大名と太郎冠者のやりとりから始まった。どうやら、弓自慢の大名が狩りにでかけ、腕前のほどを見せようといきまいているらしい。そこへ、なんと運の悪いことに、猿づれの猿まわしがやってくるのだ。猿は着物をつけ、花傘をかぶったかわいのが、キャアキャアキャアと声をあげて、大名をひっかきにくいこうとする。そのようすがあんまりかわいかったので夕子はすっかりひかれてしまい、声をひくめながらも、とうさんにきかずにはいられなかった。

—あの猿、だれがやってはんの？

—…子どもや。